

Title	「"実りある教養部改革"を求めて」を読んで
Author(s)	山口, 巖
Citation	ことばの構造とことばの論理 : 山口巖教授停年記念論文集 (1998): 802-800
Issue Date	1998-07
URL	http://hdl.handle.net/2433/65763
Right	
Type	Article
Textversion	publisher

を学ぶ機会があつて、この言語が、さまざまな言語の特徴を取り入れていることに気がついた。今は言語理論の立場から、この言語のもつ性質に興味がある。エスペラントを学ぼうとする人には、色々な動機があると思われる。世界旅行をしようという、実践的な目的をもっている人もいるだろう。外国の人と文通をしたり、話をしたりしたいという人もいるだろう。それはそれでもよいが、ザメンホフのもっていた理想も、どこか心の隅においていてほしいと、思う。

山口 教養部・ロシア語

Mi lernis Esperanton, kiam mi estis en altlernejo. Tiam mi pensis laŭ mia scio pri la angla lingvo, ke Esperanto estas latinida lingvo. Sed poste mi havis ŝancon studi diversajn lingvojn, kaj mi rimarkis, ke la lingvo alprenis karakterojn de plej diversaj lingvoj. Nun mi interesigas pri la eco de ĉi tiu lingvo de la vidpunkto de lingva teorio. Mi pensas, ke oni eklernas Esperanton pro diversaj motivoj. Eble iu havas praktikan celon, ke li vojaĝu tra la mondo. Eble iu deziras aŭ korespondi aŭ paroli kun alilandaj homoj. Tio ja estas bona, sed mi volas, ke la lernantoj memoru la idealon de Zamenhof eĉ en la angulo de sia koro.

YAMAGUCHI Iwao, prof. pri la rusa lingvo

(el la japana originalo tradukita de OOSHIDA Takeshi)

「教養部支部ニュース」特別号 1991年。

「“実りある教養部改革”を求めて」を読んで

この度標記のような文書が支部委員会から発表された。一読してさまざまな感懐が期せずして横溢するのを禁じ得なかった。折しも支部の要請もあり、一文を

草する所以である。

ここに述べられているように、いわゆる教養部の改善は、1974年、当時の溝川部長の時に提案され、教授会で承認されて、そのための委員会が組織された。その時をおよそ十年遡る大学紛争の時に、教養部は特に烈しい紛争の場となり、施設の破壊にも著しいものがあった。もとより紛争は全国的、全学的なものであったが、京大において特に教養部が主要な舞台になったについては、いくつかの原因が考えられた。その一つは当時の学生がしばしば口にしていた教養課程が面白くない、ということである。これは実は必ずしも当を得たものではなく、学生の単なる思い込みであった面も、多かっただと思われる。教養部には現在までも、優秀な人材が蝟集しており、講義もそれぞれに工夫されていたと思われるからである。私の親しく見聞した限りでも、たとえば独創的な学説を展開していることで知られている、ある教官の試験で、まさに講義に直接関連する学部にも所属する学生が、不勉強で答案を書けなかったためかも知れないが、「私は本当の勉強をするために大学に入ったのであって、こんな授業を受けるためにに入ったわけではない」と書いてあるのがみられた。これはおそらく氷山の一角であろうと思われる。このような学生の無知を笑うことは容易であろうが、このような思い込みが生じるのは、教養部が一般教育の名のもとに、前期二年に押し込まれ、教育のみをこととするように規定されていることによって、教養課程はより高次の専門課程のための予備教育であると見做す風潮が存在していたためであろうと思われる。他面、この制度は、具体的な条件によるが、教官からそれぞれの専門の講義を行なう可能性を奪い、また対象が前期二年の学生であること、予算の格差などによって、人的物的に研究の意欲を持続することが困難な状況をもたらしていたことも否めない事実である。

思惑はさまざまであったろうが、このような諸事情から教養部のあり方についてある危機感を持つ人々も、確かに存在していた。教養部改善の動きがでてきたのは、このような状況のもとであったと思われる。もちろんそこには筑波大学に象徴されるような、大学の改編についての、政府の一定の意図がなかったとはいえない。これに対応する形で当時組合の大学部は、教研集会その他で、「国

民のための大学作り」を標榜していた。

たまたま当時私は支部長をひきうけていたが、教養部改善が教授会で決められることになるというので、支部委員会の中に検討委員会を設け、この問題についての支部の態度を検討することになった。これに参加したのは、支部委員のメンバーだけではなく、事務官の主だった人もいたと記憶している。結構寒いボックスで、何回も会合を持った。その結果が、今回の支部ニュースに再録されたものである。その後の支部の活動は、この方針をどう具体化するかということに向けられた。第一項の「民主的な討論と協力」を保障するという方針の具体化として取り組まれたのは、いわゆる「教官懇談会」の開催と、その内容を周知させるためのニュースの発行であった。その趣旨からこのニュースは組合員、非組合員を問わずに配布され、さまざまなレベルの議論に役立ててもらった。この発行はワープロもまだない時代のこととて、清書やイラスト、印刷など、数多くの人々の協力を仰ぐ結果になった。しかし一方事務官や技官の問題についてはこれに相当する活動は行なわれず、弱さがあつたことを認めなければならない。

本年人間・環境研究科の第一専攻が発足し、来年は第二専攻も設けられる由である。きけば念願の学部化も認められそうだということである。衝に当たられる関係者の御苦勞も察せられるが、これらについては、発足しても残される問題、あらたに生じる問題など、多くの困難があると予想される。このような時にこそ、的確な問題の所在の指摘と、その解決の道についての、支部の先見性が問われることになるのではなかろうか。一組合員の感想である。